

# 桐生新町の仏教事情

文化・文政・天保期の名主の役用日記より

菅原征子

The Circumstances around Buddhism in Kiryu-shimmachi: from the Service Diaries of Nanushi of the Bunka, Bunsei and Tempo Periods

はじめに

- ① 桐生新町の人々に身近な寺院
  - ② 住民にとっての寺院や寺僧の存在意義
  - ③ 庶民の信仰の旅・廻国巡礼
  - ④ 寺院の勸化活動について
  - ⑤ 寺院間の交流について
- おわりに

## 【論文要旨】

文化文政天保期の在郷町桐生新町の名主の役用日記の中から、仏教関係の記事を取り出し、記事の性格に即して分類しそれぞれについてその意味を考察した。

まず入寺、これにはいくつかパターンがある。入寺ということでは住民に関わるこの時期の寺の役割とは何だったのか、それはひとつには住民の起した種々の犯罪や事件において当事者ではなく第三者的役割、仲介の労を取ることで社会的コンセンサスをつくることだが、更にそれは桐生新町にとって、また権力にとってはどうであったかなどを考察した。

ついで寺と神事祭礼・文化活動について、多くの場合寺院は仏教独特の年中行事や事業だけではなく、庶民の熱狂する神事祭礼への積極的支援や参加、種々の文化活動への協力などまさに地域の文化センターであった。こうした寺院の公共的興業的な営みが桐生新町の活況とも関わり、また仏教各宗が布教活動を展開しえたひとつの条件

にもなっていた。

ついで庶民の信仰の旅・廻国巡礼。桐生新町住民は実際によく出掛ける。いっぽう有名な霊場もない桐生新町に実によく多くの廻国行者がやって来ている。彼らが信仰にかこつけてみちみち喜捨や合力を得ながら無銭旅行をしたことの意味を考えてみた。

また勸化活動をはじめとする寺院関係者の来訪や往来はあまりに記事が多いので、①桐生新町・近在の寺院の勸化、②遠方寺院の不定期勸化、③遠方寺院の定期的勸化、④桐生地域の寺院関係者の遠方寺院への出向、⑤遠方の寺院関係者の桐生地域寺院への来訪、⑥桐生を通過した寺院関係者、という六つの表にしてそれぞれその意味を考えてみた。以上史料の性格にそくし、不十分な分析に終ったが、近世後期の一在郷町の仏教寺院と住民の関係や寺院間の動向について、末端行政と「自治」を担った名主の目を通して、従来検討されることの少なかった包括的イメージを垣間見ることができたと思う。